

# 『王水のクーゼラ』

ファンタジー世界のドS女盗賊クーゼラさんが  
今日も男たちと格闘、そして金責め玉潰し！

玉子王子 著

## 1章 裏切られ、殺されかけるクーゼラ。そして裏切り者には金潰し！

空を小さな人間が飛んでいく。  
形は人間だが、羽が生えた小人。  
妖精だった。

ここはファンタジーの世界。  
旅人がせめて雨を凌げるようにと街道沿いに作られたボロ小屋。  
そこに、一組の男女がいた。

「報酬はここに」

そうって、机に箱を置く男。

「それじゃ、俺はこれで」

「あら、ゆっくりして行ってよ」

——箱、軽かったわね。

薄緑の髪の若い女、クーゼラは腕のいい盗賊だった。

フリーで仕事を請け負ってさまざまな諜報活動を行っている。

今回はとある街の有力者から、隣町の有力者が持っている書類の奪取を依頼された。

依頼人の先祖が、隣町の有力者の先祖の兄弟だったことを示す書類。

それがあると相続の問題で依頼人が有利になるらしい。

なんだかわからないが——特にわからないのは、なぜ不利になるような書類を相手が処分せずに持っているのかだ。いや、それは依頼人の方が金持ちになれば相続権を主張できる、ということかもしれない——頼まれたものを盗ってくれば金になる。

シンプルな話だ。

「いや、急ぐから。あっ」

「そう？ そんなに急ぐ？」

スルリと近付いて、太股の間を的確に握る。

ムニムニと、指で肉玉を愛撫しつつ、掌で一物も擦る巧みさ。

——おおっ、ここの盗賊女、上手い……ここで殺すには惜しいが。秘密を守るためだから。でも、ちょっと楽しんでいくのはいいよな。この女、その気みたいだし。

「うふふ、こっちにも剣持ってるのね」

「それほどでも……」

あっさり反応してきた男に愛想よく笑いつつ、クーゼラの内心はまったく違う。

——なーにが剣よ、果物ナイフがいい所でしょ。っていうか、ろくに知らない盗賊女によくキ〇タマ任せられるわね。一瞬で握り潰してあげてもいいのよ？ まあ、魔法で治るんだからいいのかな？

街の神殿に行けば、治療魔法を受けることが出来る。

潰れた玉ぐらいなら、結構安価に治してもらえる。火傷などの方が範囲が広くて高いぐらいだ。

昔それを聞いたとき、クーゼラは笑ってしまった。

——キ〇タマだなんだと言っても、安いもんなのよね。

揉みながら、窓から外をうかがう。

よく気配を探ると、何人か人がいる。

岩陰や、近くの木と草の陰。

チラチラと、槍が見え隠れする。

武装した人間が隠れていると見るしかない。

——口封じってこと？ 意味なくない？ 私何も知らないんだけど。

ぼっと雇われ、依頼通り書類をパクって来ただけの事だ。

それは、書類は盗むために読んだが、内容を知られて困るわけでもない。

というより、内容が広まった方が依頼人としては得ではないか。

いや、盗ませた、というのが問題なのか。

前から家にありました、という方がいいということ。

——勝手な話ね。

「ああ、もう出る……」

「我慢強い方ね、この前の人はこの半分で出ちゃったわ」

——なわけないでしょうが、玉揉みとちょっと竿を掌で刺激しただけで出るって早漏すぎるでしょ。

と、扉が開く。

岩陰などに隠れていた男たちが、部屋の中に入ってくる。

剣や槍を持っているが、鎧は着ていないごろつき風の男たち。

「おいお前ら」

「遅いんですよ」

「っていうか、俺らも混ぜてくださいよ」

「ちょっと、どういうことですか？」

大体わかっているが、一様たずねるクーゼラ。

「そりゃ、お前は口封じされるって事」

「嘘でしょ？」

「いや、本当なんだ」

流石に手を放させつつ言う男。

「俺はあんまり……お前を殺す必要はないといったんだけどね？」

本当かよ、と心からクーゼラは疑うが、困惑した顔は変えない。

「そういうわけだ。でもその前に俺らを楽しませてくれれば、楽に殺してやるぜ」

「そう……仕方ないわね。諦めるわ。私も楽しんでから死んだ方が得だもんね」

「へへへ、話が早いぜ」

多少は武器が使えるそうな男たち、三人。

それと、依頼人との中継ぎ役が一人。

「四人か……」

「前後に、手と口で四人ってところだな」

男が涎を垂らす。

ニコ、とクーゼラが笑う。

男たちが武器を横において、近付いてくる。

クーゼラも、短剣を机の上に置く。

一番腕が立ちそうな男に抱きつき、口付けと同時に膝を振り上げる。

「ぐむっ」

——キ〇タマがっ！ こ、この女……

男がクーゼラを突き放そうとするが、肉玉を蹴り上げられた直後で力がろくに入らない。

クーゼラの拘束も、力がないかわりに的確で、相手の動きにあわせるのでまったく弛まない。

周りは、そのやり取りにまったく気づいていない。

ただ、熱烈にキスしているようにしか見えない。

おっさんより、クーゼラに注目するから当然だ。

彼女は本当に相手を求めているかのような口付けの形をしている。

「おお、いきなりお熱いね」

男たちの視線が自分の口付けに集まると計算しての先制膝金蹴りだった。

潰す気で蹴り上げたが、中々そうもいかない。膝の感じ、相手の反応で潰れていないことを悟るクーゼラ。

口づけの振りを続けつつ、膝で相手の腰骨にゴリゴリと肉玉をするつける。

少しでもダメージを与え、しかしばれる前に動かねばならない。

口を離す。

「次はこっちね」

「おお、はぐっ！」

ゴチャ、と今度は隠すこともない爪先金蹴り。

「こ、この女！」

三人目の戦士が叫ぶが、後ろの武器に手を伸ばそうとしたのが運のつき。軽いステップで近付き、クーゼラが二発目の爪先金蹴りを叩き込む。

「はぐううあっ！」

先の二人とは明らかに違う反応を見せる男。

クーゼラが目を輝かせる。

「あはっ！ 今のは上手く当たったね！ ブチって、足の甲でキ〇タマ潰れる感触があったよ！ まあ、一個だったと思うけど……」

それでも白目を剥き、泡を吹く男。

「うわっ」

中継ぎ役が真っ青で叫ぶ。

はじめに膝金蹴りを喰らった男に、何とかしろと叫ぶが、そのときにはゆっくりと膝を突いていくところだった。

「無駄よ、その人キ〇タマ痛くて動けないって」

その腕利きの頭を押さえ、膝を顔面に叩き込んで止めを刺す。

鼻血を巻き散らして転がる腕利き。

「うわ……わっ」

逃げようとする中継ぎ。

だが、そのためにはクーゼラの前を通らねばならない。

それは無理だ。

なら、もう戦うしかない。

窮鼠猫を噛む。

震えながらも長剣を掴み、引き抜く。

「おっと、遅いよ坊ちゃん」

大胆に踏み込み、腕を押さえ、剣を振れなくするクーゼラ。

「こんな狭い所で長剣なんて無理よ。っていうかあなたの腕じゃねえ。あなたのチ○ポぐらい小さい武器にしないとだめだったわね」

「な……おぐっ」

膝金。

ゴチャ、と音だけで玉が縮む。

「おごおおお」

後で話も聞きたいので少し手加減したクーゼラだったが、十分戦意が吹き飛ぶ中継ぎ。

手が弛み、剣が床にゴンと落ちる。

横目で見るとクーゼラ。

「重そうな剣ね。私にはとても使えないわ。キ○タマついてりゃどんなボンクラでも腕力だけはあるのね」

「た、助けて……」

「あらあ、流石にわかるのね。殺そうとして……っていうか、殺す前に犯っちゃおうなんてことをした男が、女の子に返り討ちにあったら……どの辺がどういう事になるか」

グリグリと、肉玉を膝で転がす。

と、接近戦用の肘打ちで横から中継ぎの男の顔を打ち抜き、壁に突き飛ばしつつ振りかえる。

「う、うおおお！ このクソ女！」

爪先蹴りで、中途半端なダメージを与えただけの男が後ろにおいていた長剣を抜いていた。

「無理しなさんなって……キ○タマ痛いでしょ？」

「お、お前ぐらい、油断しなきゃ」

突きの構え。

涎を拭くこともせず、剣先を震えさせながら血走った目を向けてくる。

ため息をつくクーゼラ。

「もう諦めたら……っていても、無駄よね」

悶絶した仲間二人を放って逃げれば、この先の付き合いが問題だ。

それに、女盗賊一人ぐらい、多少万全でなくてもなんとかなると本気で思ってもいる。

「それじゃ……」

手を後ろに。

武器を握る。

「あっ」

引っ張る。なすすべなく、引っ張られてくる中継ぎの男。

「さっさところないと、キ〇タマ潰れるよ！」

縮んだ肉玉を握りこんで引っ張り、突きの構えの男に中継ぎの男を叩きつける。

「うっ！」

普段ならステップを踏んでかわせたかもしれない。

だがクーゼラに蹴られた肉玉が痛み、素早い脚の動きをとるのが遅れる。

ぶつかって絡み、倒れる。

「く、くそ……あっ」

「はい、キ〇タマゲット」

クーゼラが、二人の上ののしかかるようにして押さえ込む。

そして手を突っ込み、肉玉を握っていた。

「は、はな……ぬぐうううっ」

ギュムウウウウウウウ、非力な女の力を右手の一点に集中させ、男の肉玉を圧殺しに行くクーゼラ。

何の助けにもならないのに、男の全身が硬直する。

背筋が伸びる。

肉玉が締め潰される。

「ま、まって、頼む……つ、つぶれ……」

「潰してんのよ」

握る握る、握り潰す。

何の容赦もなく、平常な顔で肉玉を潰しに行くクーゼラ。

時間としては、ごく短い、数秒程度のこと。

「やめ、玉は……あっあああああああああああああああああああ！」

「はい去勢。この、手の中で悪い男のキ〇タマが潰れる感触ほどいいものはないわね。ブチュ、ブチ、グチャっ、なんだろう、例えるのが難しい感じね」

中継ぎ男の下でもがいていた男の頭が、ゴトンと床に落ちる。

「ひ、ひい……」

腕利きの男が、這って逃げようとしていた。

潰れてはいないとはいえ、念入りにやられた膝金のダメージが大きすぎ、足腰立たない。

「なーにびびってんのよ、人のこと犯して殺そうとしておいて」

「ち、違う！ あれはあれ、ほら、聞き間違いというね」

「へー、そりゃ誤解して悪かったわ」

机の上においていた短剣を始めて抜く。

そして、腕利きのズボンを掴んでベルトの辺りをきる。

引っ張るとズボンもパンツも一気に脱げる。

「ひ、ひいいい！」

恐怖の絶叫を上げる男。

その声を聞いて歯を見せるクーゼラ。

——この状況で下半身を脱がされるのは、女よりむしろ男の方が恐怖が大きいでしょうね。おチンチ○なんて完全に弱点以外の何物でもないんだし。

下半身裸で、それでも少しでも遠くに逃げようとする男。

その前に、無慈悲に小走りで回りこむクーゼラ。

「えへへ、おじさんかっこいいから、エッチしようよ」

「え、嘘」

そんな話信じられたら相当能天気だが、最後の希望となればさすがなのかもしれない。

少し顔を緩める男の頬に、しゃがんで優しく手をやるクーゼラ。

「嘘に決まってんでしょうが。キ○タマ潰させなさいよ」

「いやだああ！」

顔を蹴飛ばし、仰向けにさせる。

「へへ、無防備な男には、やっぱりこれよね」

足を掴んで開かせる、無防備な男の全てがあからさまになる。

その肉玉に、ブーツをあてがう。

電気あんまの形だが、ファンタジー世界なのでそういうものは存在しない。

「やめてくれええっ！」

「何度そういう女の子を犯したの？」

「え、何人ぐらいだったかな……おぐっ！」

「腐れキ○タマはここで潰してあげるわ。魔法で新しいキ○タマ治してもらって、真人間になりなさい」

別に玉を治しても何も変わらないが、クーゼラも口からでまかせにしているだけだった。

足を上げて肉玉を踏み潰し、踏みにじってまた上げる。

「そらそら、って言うか結構チ○ポでかいじゃん」

踏みつけるのに股間を見て、気づくクーゼラ。

かなり縮んでいるが、先っぽはそう縮まないのだから男のモノが大きいのがわかった。

そう言われて、涙と涎と鼻水を垂らすだけだった男が急に顔を輝かせる。

「そ、そうだろ、どうだ？ 俺のチ○ポは皆病み付きになるんだ、お前もこれで……おぐったああああああ！」

「残念、逆転無しだから」

「何だそれ！？ うぎゃああああっ！」

「大げさね。このぐらいの踏み付けでそんなに痛いわけないでしょ。そらそら」

「や、やめて……潰れる……潰れるからやめてくれっ」

「だから、このキ○タマは潰すって言ってんでしょが」

電気あんまの形で、脚を振り上げては叩き落す。グリグリと脚を左右に揺らして踏みにじる。

ブーツはそう長くはなく、スカートも太股の真ん中辺り、脚を激しく動かせば肌が露出する。

それが剛毛に覆われた男の脚と触れる。

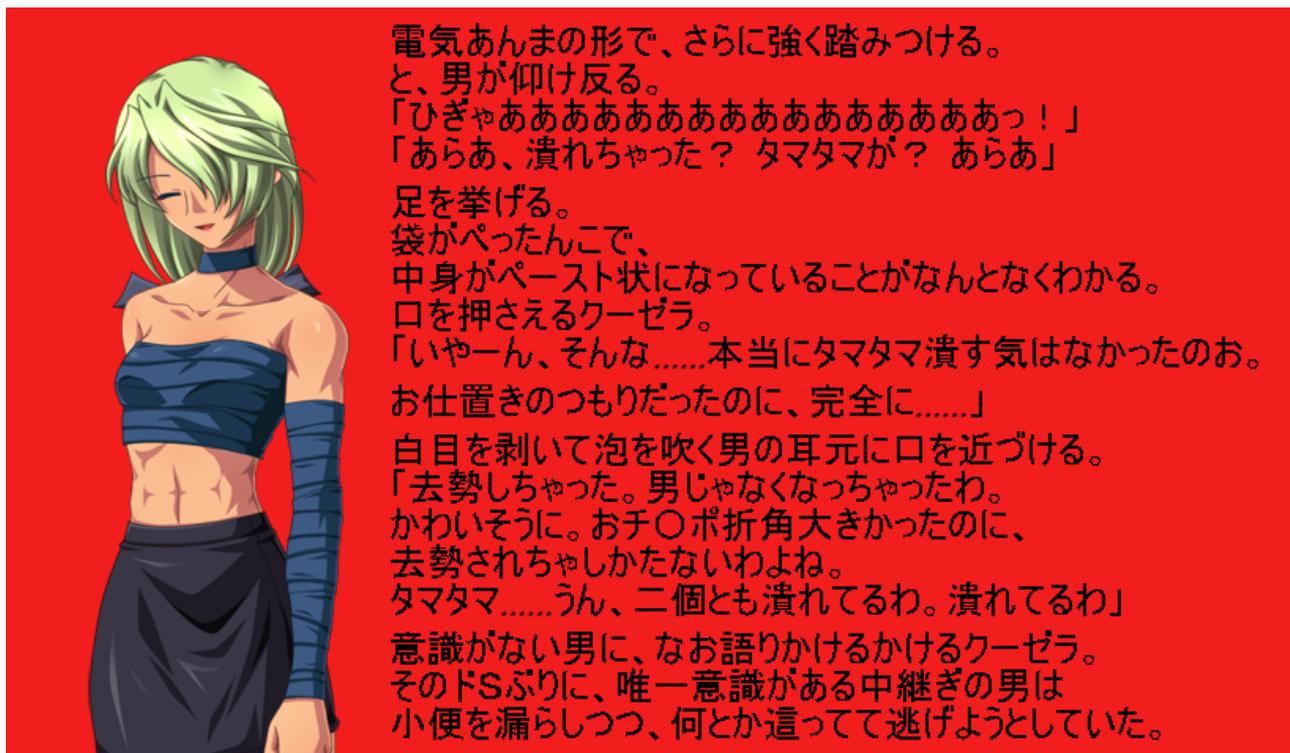
——いいわねえ、剛毛の方が男のキ〇タマ踏み潰してる、って強く認識できるわ。っていうか普通にやるときも、こんなゴリラみたいなのにやられちゃってる、って興奮するし。剛毛の方がいいわよね。

ゴリラ、というが彼女が正確にゴリラをイメージしているわけではなく、そういう大猿がこの世界にもいるということだった。

電気あんまの形で、さらに強く踏みつける。

と、男が仰け反る。

「ひぎゃあああああああああああああつ！」



「ああ、潰れちゃった？ タマタマが？ あああ」

足を挙げる。

袋がぺったんこで、中身がペースト状になっていることがなんとなくわかる。

口を押さえるクーゼラ。

「いやーん、そんな……本当にタマタマ潰す気はなかったのお。お仕置きのつもりだったのに、完全に……」

白目を剥いて泡を吹く男の耳元に口を近づける。

「去勢しちゃった。男じゃなくなっちゃったわ。かわいそうに。おチ〇ポ折角大きかったのに、去勢されちゃしかたないわよね。タマタマ……うん、二個とも潰れてるわ。潰れてるわ」

意識がない男に、なお語りかけるクーゼラ。

そのドSぶりに、唯一意識がある中継ぎの男は小便を漏らしつつ、何とか這って逃げようとしていた。

「ああ、どこいくの？ 勝手なことしたら、キ〇タマ潰しちゃうよ？」

中継ぎの男が空きっぱなしの扉の辺りまでくるまで待つてから、扉を閉めて肩を叩くクーゼラ。

「ああああああ！ た、助けて！」

バタバタと床の上で手足をばたつかせる男。

その背中の上に柔らかい尻を押し付けて座るクーゼラ。

「うふふ、助けてって、どっち？」

「ど、どっちとは？」

「ああ、何か床、濡れてない？」

「……」

「小さい子供いたかしら？ オシッコ漏らしちゃったみたいねえ、どこかしらね、その子」

ニヤニヤと、中継ぎの男の表情を伺うクーゼラ。

責めるネタは逃さないクーゼラに、極限まで股間を縮み上がらせる中継ぎの男。

「で、どっち？ 助けて欲しいのは、タマタマ、命？」

「そ、それは両方……」

「私を殺そうとして、両方？ 選ぶほどのことじゃないでしょ。だってタマタマ潰れても、生きてれば魔法ですぐ治るんだから」

そっすね！ じゃあ玉潰しで！

などという男がいるわけがない。

「た、頼む……両方助けてくれ」

「だめよ。そんなこというなら……」

「ま、まさか両方……」

「予定通り玉潰しよ」

「なんかほとんど選択肢ない……」

「私が喜ぶようないい絵を書いた場合だけ、あなたのタマタマは助かります」

「絵を」

「一様言っておくけど、計画のことよ。お金儲けの」

「そんなこといわれても……あ、そうだ！ 主の館の警備とか、大体の金の隠し場所、わかります！」

「それは嬉しいけど、あなたそれでいいの人として？」

「男としては、玉と引き換えなら」

「そう」

——でも潰れたって治るのに。一時的な金潰しを免れるためにこんなことを……

思いつつも、一様メモを取って中継ぎの話を聞くクーゼラ。

周りでは、肉玉を潰された男たちが泡を吹き、低く呻き続けていた。

が、それはドSのクーゼラにとっては**気の休まる BGM**でしかなかった。

体験版終わり

この後クーゼラはさらに金責め玉潰しを繰り返し、  
四つの玉を潰して二人の男を去勢し、金責め回数は数知れず、というドSっぷりを見せていきます

続きは製品版でお楽しみください